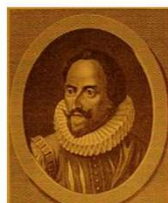


## 没後 400 年：シェイクスピアとセルバンテスの作品の舞台を訪ねて

「東京のドン・キホーテ」の由来  
セルバンテスの生家から  
ラ・マンチャ平原の舞台を訪ねる  
従者サンチョ・パンサとの会話や諺の数々  
エル・トボソのドン・キホーテ博物館



「ハムレット」：シェイクスピアはクロンボー城を訪れてはいない！？  
”To be or not to be, that is the question!”  
あなたならどう訳しますか？

坪内逍遙先生の訳では？

名訳中の名（迷）訳が出てきた？

「ロミジュリ」の舞台はどこ？

「ああ、ロミオ様、ロミオ様！」

翻訳の素晴らしさが作品を更に高める

ジュリエットが住んでいた館

“I love you.” ——愛の表現の千差万別



シニアの休日 in Rome

「早稲田は地球の上にあります！」



本日の講演原稿と写真は、ホームページ <http://donky.la.coocan.jp/> の「講演会のスピーチ」欄に掲載の予定です。（清水武）

パワーポイントで 50 枚ほどの写真を紹介しながら話をさせていただきました。全部を入れると長く重くなるので、ここでは代表的な写真に絞りました。掲載されていない写真についても赤字で説明していますのでこれでお許してください。

### タイトル

#### 没後 400 年のシェイクスピアとセルバンテス

皆さまこんにちは。昭島稲門会の総会にご出席いただきありがとうございます。少々儀式的な総会の後（やむを得ませんね。議事ですから）、第二部では、少しくつろげる楽しい話をとの思いで、定年後に私が訪れてきた世界の文学作品の中からシェイクスピアとセルバンテスに焦点を当て、作品の舞台の写真 50 枚ほどをご紹介しますとお話しさせていただきます。

なぜ今シェイクスピアとセルバンテスなのか——実は今年はこの世界的文豪二人の没後ちょうど 400 年（しかも亡くなった月まで同じ）という節目に当たるのです。日本では、今年、夏目漱石没後 100 年ということで、一部の新聞や雑誌が特集を組んでいますね。

セルバンテスの生まれたスペインではそれほどでないようですが、シェイクスピアの生まれたイギリスでは 400 年を記念するいろんな行事が催されているようです。

坪内逍遙先生のいた早稲田の校友の皆さまですので、この二人の作家の作品については読んでいらっしゃる方もきっと多いのではないかと思います。よく、シェイクスピアは英文学の原点、セルバンテスはスペイン文学の原点と言われてきました。奇しくもその二人が今から 400 年前の 1616 年に亡くなったんですね。

総会の案内文書の演題には、「シェイクスピアとセルバンテス」の順序になっていますが、私が作品の舞台を訪ねた順序にしたがい、最初にセルバンテスの『ドン・キホーテ』からお話しさせていただきます。

#### 「東京のドン・キホーテ」の由来

私は定年後の自分に「東京のドン・キホーテ」との名前を勝手に付けました。  
——なぜ、私がドン・キホーテなのか？

それは、小学校の 6 年生までさかのぼります。学芸会にクラスで『ドン・キホーテ』の劇をすることになり、私がドン・キホーテの家来サンチョ・パンサ役を演じたのがきっかけでした。

以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて少年向けの本を、大人になってからは長編の全訳本を読みふけたものでした。また、信濃町にある日本スペイン協会で、原書による勉強会があったとき、週に 1 回、1 年間出席、さらに、松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も時と劇場を変えて計 3 回、見に行きました。かなりの凝り性だったといえるかもしれません。

セルバンテスは 58 歳のとき前編を、68 歳のときに後編を出版しました。ほぼ自分と同じ年代でした。

ということで、400 年前、槍を掲げ愛馬ロシナンテに乗っていたスペインのドン・キホーテに対して、私め、現代の東京のドン・キホーテは、槍の代わりにカメラを掲げ、馬の代わりに飛行機に乗って“見果てぬ夢”に向かって世界文学の旅を続けている次第です。

### スペイン地図

私は、定年直後にスペイン語のレベルアップと『ドン・キホーテ』の勉強のために、南スペイ

ンのマラガ大学に1年間留学しました。そのとき、作品の舞台・ラ・マンチャも訪れ、少しばかりのリポートも書きました。

留学の時の写真です。

休憩時間中の校舎の入り口付近

教室の授業風景、とてもリラックスしています。

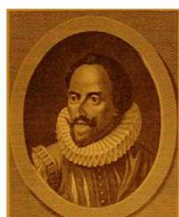
留学生は主に他のヨーロッパ諸国と北米、中にはアフリカからも来ていました。日本からは大学生が3人とOLが1人。全体で200人ほどの学生の中で私はどうも最年長の感じでした。

滞在していたマンションに同じ教室のクラス仲間を招待し日本食等を作って激励、交流したときの写真です。地中海の朝焼けです。

そして帰国して3年目の2005年。『ドン・キホーテ』出版400周年の年、私は友人のカメラマンと一緒に再び作品の舞台を訪れたのです。

セルバンテスの生家から

#### セルバンテスの生家



二人の旅はまず作者セルバンテスの生家のある町・アルカーラ・デ・エナーレスへその一歩を運んだのです。

マドリードから東へバスで約30分。街に入ると車道の両側には「セルバンテスのドン・

キホーテ 400周年——作者の町：アルカーラ・デ・エナーレス市議会」といった具合にカラーのエンブレムが置かれ訪問者をにぎやかに歓迎していました。

ドン・キホーテの生まれた家ですね。

生家前のドン・キホーテとサンチョ・パンサと一緒に記念をとどめました。

続いて首都マドリードのスペイン広場を訪れました。広場周辺の街の様子です。

スペイン広場。ドン・キホーテとサンチョ・パンサの後方上に座っているのが作者のセルバンテスです。スペインの至る所でこうした二人の像が見られます。

セルバンテスの肖像

長編小説の書き出しは次のようになっています。

——ラ・マンチャ県のさる村、名は思いだしたくない村に、さほど前のことでもなく、槍かけに槍、古びた楯、ひょろひょろ馬にはしっこい狩犬をそろえた、型のごとき郷土が住んでいた。



マドリード・スペイン広場



昼は羊肉よりも牛の勝った煮込み、たいていの晩は昼の残り肉へ玉ねぎなど刻みこんだサラダ、土曜日に塩豚の玉子あえ、金曜日にレンズ豆、日曜だと小鳩の一皿ぐらいそえて、それだけに収入の4分の3が消えた——（永田寛定<ひろさだ>訳＝以下の引用も同じです）

### ラ・マンチャ平原の舞台を訪ねる

そして、小説『ドン・キホーテ』でもっとも有名なくだりは、主人公のドン・キホーテが遠くに見える風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ場面でしょう。私たちはその有名な場面の舞台、ラ・マンチャを訪ねました。



ラ・マンチャの平原<留学時代に訪れた夏のラ・マンチャと出版400周年でカメラマンと訪れた秋のラ・マンチャと風車>

ラ・マンチャ平原の風車は今はどれも回っていません。かつては風力を利用して粉ひきに活用されていたものが現在は観光用として活用されています。

ドン・キホーテはこの風車を悪魔の巨人と信じ込み戦いに挑んだのです。

この部分を永田寛定訳で引用してみますと：

<浪曲調に>——この時、あの大野には今もある粉挽場の風車が三、四十あらわれた。ドン・キホーテは、それに目をとめるやいなや、従士に言った。「天はわたしたちの仕事を、願ってもみられないほど上首尾に、運んでくださるぞ。それ、あそこを見なさい、サンチョ・パンサ。山のごとき巨人が三十ぴき、いや、もちっとじゃろうな、立ち現れたではないか。かれらと一戦におよび、みなごろしにしてくれよう……」

「巨人がどこに」と、サンチョ・パンサがきいた

「それ、あそこに見える長い腕のやつらじゃ」と、主人が答えた。「なかには、腕の長さ二里に達するのさえ珍しくないぞ」

「おめえ様、待ってくんないせえ」と、サンチョ。「あそこにめえるは巨人でねえ。粉挽場の風車です。腕とめえるのがね、それ、風でまわって石臼を動かす、はねぎだあよ」

.....

サンチョの止めるのも聞かずにドン・キホーテは乗っているロシナンテに拍車をくれ、一ばん手前の風車に突いてかゝった。すると、槍先がはねぎにふれようとし時、にわかにかき起こった風が恐ろしい勢いではねぎを回転させたから、槍はぶち折れるし、馬と騎手はそっくりさらわれて、後方へぽんと棄てられ、さんざんな態たらくで、野っばらをころがっていった——

作品の全部を知らない人でもここだけは知っている方も多いでしょう。あまりにも有名なシーンですね。正義を求め、悪と戦うために槍を抱えて風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化ともいえるでしょう。文中には二人の間の滑稽なやり取りや諺が頻繁に出てきます。ドン・キホーテもですが、サンチョ・パンサの言



葉もいい。

## 二人の間の会話や諺の数々

「人間寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」「この世を捨て、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇もおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも召使いのからだも、よしんば背たけに違いはあろうと、占める広さに変わりはないねえ」。

——そう、どんなに偉い人でも寝ていて畳 2 畳以上を独占することはできません。また、死んだらどんなに金持ちであっても権力者であってもそれを来世に持って行くことは出来ない。死んだらみんな同じになる——人生の究極の真理ですよ。

物語は長編ですがわかりやすく面白い。しかしながら、それをどの程度深く理解できるかは、読者の成熟の度合いにかかっているとも言われています。

ミュージカル「ラ・マンチャの男」でドン・キホーテがつぶやいています。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ、本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」——

——夢を持つことの大切さ。また、周囲にどう見られているか、などを気にして自分の信念の道を進まない生き方を鋭く突いています。

ドン・キホーテのことを“年老いた気が狂った爺さん”と見る人もいます。でも私には、滑稽な冒険譚もさることながら、狂気と言われながら、悪を懲らしめ、正義を求め、夢に向かって進む主人公の姿に惹かれるものがあるのです。

ドン・キホーテが騎士の称号を授けられたお城（旅籠）です。

## エル・トボソのドン・キホーテ図書館

続いてエル・トボソにあるドン・キホーテ図書館を訪ねました。朝の早い時間ということもあって、他の訪問客もなく、館長自らが案内という幸運に恵まれました。

全部で 54 カ国語の「ドン・キホーテ」があるといいます。2 階建ての各階の陳列棚には言語別の翻訳本とスペイン語による短い説明がありました。本を寄贈してきた国家元首等のサインもあります。アメリカのレーガン大統領、イギリスのサッチャー首相、フランスのミッテラン大統領、ポーランドのワレサ大統領、南アフリカのマンデラ大統領など。なかにはイタリアのムッソリーニからのものもあり、歴史の一段面をのぞかせていました。

言語で言えば ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、ヒンディ語、ベトナム語、トルコ語、エスペラント等もある。館長は言葉を続けました。「数日前には、南米のエクアドルからケチュア語で翻訳されたものが届いたんですよ」。スペイン国内でも、バスク語、カタルーニャ語、ガリシア語等の言語もありました。

日本語の訳本のある場所へと急ぐ。2 階の一角の展示棚。1927 年の高田早苗による訳本がありました。「日本語では、他にも永田とか会田また牛島とかの訳本もあるんですけど……」と私。

「ええ、私も翻訳者の名前は知っています。でも展示場所がないので別途に保管しているんです」と館長の説明でした。

博物館のすぐ近くには村役場がありました。エル・トボソ村の女性村長にインタビュー



このときの紀行文は郷里の信濃毎日新聞に5回にわたり連載され、それはまたセルバンテスの生まれたスペインのアルカーラ・デ・エナーレス市の新聞にもスペイン語で掲載されました。紙面の上部には「インタビュー『タケシ・シミズ：日本語を話すドン・キホーテ』とあり、タイトルは『日本も多くのドン・キホーテが必要になってくるかも』となっています。紙面の真ん中にある日本語の部分は、信濃毎日新聞の連載の第1回目です。

私の“見果てぬ夢”の一端が実現した旅となったのでした。

クロンボー城＝シェイクスピアは訪れてはいない！？

デンマークの地図 コペンハーゲンの港

2010年6月の初旬。首都コペンハーゲン中央駅から列車で北上すること約50分、ヘルシンゴー一駅に到着しました。レールも車両幅も広いいためか、かなりのスピードなのに揺れが少ない。車窓の両側には菜の花畑の黄色と麦畑の青さが遠くまで広がっています。国土の60%が耕作可能という豊かなデンマークの農業事情を映し出しているようでした。

4人が向かい合う形の座席。目の前には太った恰幅のよい紳士が座っていました。今回の取材旅は私一人です。旅は道連れ。私は「東京から来たカメラマンです」と自己紹介。「これから『ハムレット』の舞台となったお城に行くんですよ」と私の言葉に彼は言ったのです。



シェイクスピアの肖像

「シェイクスピア？ それはいいねえ。でも知ってるかい？実は作者はシェイクスピアではないんだよ。デンマーク人の8割はシェイクスピア作と信じてはいるけどね・・・」。

事前の資料収集のなかで、作者の真贋や、著者がこのクロンボー城を実際に訪れたかどうかについて書かれているものもありましたが、まさかこんな「舞台の現場」に向かう列車の中で同じような話を聞くとは思いませんでした。

もう40年近くも前のことですが、朝日新聞で世界の文学作品の舞台を訪ねる「名作の旅」なる連載をしていました。その後、連載は上下2冊の本にまとめられた。その古い本を昭島図書館から借りてきて『ハムレット』の項を再読してみた。そこでは当時の名記者・白井健策氏も「やっぱりシェイクスピアは城には来ていなかった」と結論づけ、それでもシェイクスピアが新しい一つの世界を作り出した腕に驚嘆を表明していました。

まずは何よりも自分の目で確認してみることだ！私はヘルシンゴー駅から10分あまり歩くと、バルト海の岸边にそびえるクロンボー城（別名エルシノア城）に着きました。

クロンボー城の城壁

入口付近にはデンマークの国旗が高く風になびいています。

城はちょうどロの字の形をして、真ん中は中庭になっている。その石畳を舞台に、夏には野外劇

「ハムレット」が上演されるといいます。

ストーリーはご存知の方も多いと思うのですが、念のためにあらすじをおさらいしてみますと：

デンマーク王が急死する。王の弟クローディアスは王妃と結婚し、デンマーク王の座に就く。父王の死と母の早い再婚とで憂いに沈む王子ハムレットは、父の亡霊が夜な夜なエルシノア城の城壁に現れるという話を聞く。亡霊に会ったハムレットは、実は父の死はクローディアスによる毒殺だったと告げられる。

復讐を誓ったハムレットは狂気を装う。王と王妃はその変貌ぶりに憂慮するが、宰相ポローニアスは、その原因を娘オフィーリアへの実らぬ恋ゆえだと察する。父の命令で探りを入れるオフィーリアを、ハムレットは無下に扱う。あるときハムレットは、母である王妃と会話しているところを隠れて盗み聞きしていたポローニアスを、王と誤って刺殺してしまう。オフィーリアは度重なる悲しみのあまり狂い、やがて溺死する。ポローニアスの息子レアティーズは、父と妹の仇をとろうと怒りを燃やす。

ハムレットの存在に危険を感じた王はレアティーズと結託し、毒剣と毒入りの酒を用意して、ハムレットを剣術試合に招き、秘かに殺そうとする。だが試合のさなか、王妃が毒入りとは知らずに酒を飲んで死に、ハムレットとレアティーズとも試合中に毒剣で傷を負う。死にゆくレアティーズから真相を聞かされたハムレットは、王を殺して復讐を果たした後、事の顛末を語り伝えてくれるよう親友ホレイショーに言い残し、死んでいく……といった内容ですね。

私はまずハムレットが父王の亡霊を見たという塔の上に立ちました。

#### 城の屋上

小説では寒く、暗く、不気味な荒々しい冬の城のイメージで描かれていますが、ラッキーというべきか、アンラッキーというべきか、初夏のスカンジナビアの空はあまりにも青く澄み、吹き抜けていく風も心地よい。のどかにカモメも飛んでいる。紺青の海を挟んですぐ向こうにはスウェーデンが見えます。



私は物語のイメージを探ろうと、塔から降りると展示室から教会へ、さらに薄暗い地下壕まで歩を運びました。

#### 展示室

でも、自分ひとりでの探索では、母親の王妃とハムレットの会話はどこの部屋でなされたのか、ポローニアスの刺された事件現場はどこなのか等はわかりません。そこで再び入場料を払った受付に戻ると、その日の責任者らしい男性に聞いてみました。両手を広げジェスチャー豊かに話す男性からは予期もしなかった言葉が返ってきたのです。

「Nobody knows! (誰もわかりませんよ)」。氏の話しっぷりからは「そんなこと聞かれたって、そりゃ無理ってもんだぜ!」といった少々くだけた訳が合うでしょう。

なんとも“名言”だと思いました。だって架空の話の舞台がどこかはわかるはずがない。それ

でも、これまで書かれてきた訪問記のなかには、案内嬢が「ここがオフィーリアとハムレットが言葉を交わした場所でありまして・・・」と説明された、なんて記述もあります。観光地としてはそこまでサービスしないと訪問客の期待に応えられないからなのでしょう。

### ”To be or not to be, that is the question!”

シェイクスピアはデンマーク国民史をもとに『ハムレット』を書き、このクロンボー城の名を不朽にとどめました。他の3作品、リア王、マクベス、オセローと併せた4大悲劇の中でも最も知られた作品であり、その主人公の性格や発した言葉の解釈については、長い文学史のなかで、最も論議された、最も魅力的な人物の一人でしょう。

とりわけ人口に膾炙している言葉は、第三幕第一場に出てくる”To be or not to be, that is the question!”でしょう。

### To be or not to be, that is the question!

英語を勉強した人だったらそれほど難しい文ではないですよ。でも奥の深い世界的な文学作品です。特に前半部分をどう訳すか、明治時代以降、多くの日本人が悩んだようです。

### 坪内逍遙先生の訳では？



初期の日本語訳の代表的なものの一つに、坪内逍遙訳があります。

#### 坪内逍遙の肖像

それは「世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢや」（1926年）とあります。先生は1909年の『ハムレット』に始まり1928年まで独力でシェイクスピアのほぼ全作品を翻訳刊行しました。

坪内逍遙記念館：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館は、逍遙の古希とシェイクスピア全訳の偉業を記念して創設されたもの、と聞いています。

以来、いろいろな訳され方をしてきましたが、それらはみな次の2点に集約されるようです。

- ① 「be」の「ある（という状態）」を、どんな日本語に置き換えるか。{ある、存在する、実在する、生存する、等々}
- ② 「or not to be」の部分で、「To be」の否定語で訳すか、対語で訳すか。  
つまり、「あるべきかあらざるべきか」又は「生きるべきか死ぬべきか」という、2つのパターンになるという。

最も受け入れられている訳は、「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か）」それが問題だ」だと思います。中世の英語を翻訳できるような力は私にはとてもありませんが、それでも再度、作品を読み、舞台の現場を訪れた自分としてはこの部分を次のように訳してみました。

#### 「何が真実なのか、何が真実でないのか、それを究めるのが最重要課題である」

これは、人間対人間の葛藤の中で、正義と真実を求めて懊悩するハムレットの生命からの叫びなのです。そしてこの重い言葉は、今を生きる私たちにも、人生のあるべき生き方とは何なのか、本当の正義とは何なのか、根本的な問いを投げかけているような気がするのです。

### 名訳中の名(迷)訳が出てきた？

こんなくそまじめな解釈を試してみた自分ですが、今日の講演のための参考にとネットを見ていたら、これこそ名訳中の名(迷)訳かも、と思われる訳にぶつかりました。

それは大阪弁による日本語訳です。



” To be or not to be, that is the question!”

— やったるか〜、あかんか〜、ほな〜、どないしょ〜。 —

これは、まさに紛れもない名訳です。父王の敵をとるというハムレットの深い悩みの心情を、非常によく表現できています。

ネットに書かれていた訳の背景を要約してみますと：

最初の「To be」は、多くの訳者が悩んだように、どんな言葉を当てはめても構わない。たまたまそれが大阪弁で「やったるか」に落ち着いたのに過ぎない。

続く「, or not to be」は、「To be」を何と訳すかに関係なく、「あかんか」という大阪弁がシツクリと合う。そして、この大阪弁の名訳が名訳たる所以は、後半部分にある。

「that is the question.」は、他の和訳では、殆ど例外なく「それが問題だ」、またはその類似の言葉になっている。

しかし、大阪弁では、「どないしょ〜」にした。これは、ハムレットの心情を読み取って、「that is the question.」を、「I'm at a loss what to do.」（一体どうすればよいのか途方に暮れている。）と解釈したからに他ならない。

なるほど、名訳中の名訳とも言われるゆえんでしょう。皆さまだったらどう訳されますかね？ 一日翻訳者になって悩んでみるのも楽しいかもしれませんね。

以下は参考までの写真です。

デンマークは自転車の国です。自転車専用道路が区切られていて通勤に利用されています。

デンマークはまたアンデルセンを生んだ国。オーデンセにある博物館見学をしていたとき、写真真ん中の左にいるピンクの衣装を着た子が「私たちが撮って！」と声をかけてきたのです。みんな本当に可愛いですよね。仲間の女子高生とのことでした。せっかくの写真なので皆さまにもご披露したところですよ。



### 「ロミジュリ」の舞台はどこ？

少々ややこしい翻訳の話が続きましたが、ここからはシェイクスピアの悲劇でも別分野の永遠の純愛小説についての話に移ります。

ここで皆さまに質問です。『ロミオとジュリエット』の作品の舞台はどこでしょうか？

シェイクスピアの生まれたイギリスでも、先の『ハムレット』の舞台デンマークでもありません。

そう、イタリアのベローナなのです。

イタリアの地図 映画のワンシーン

ベローナの町にはジュリエットが住んでいたという館がありました。でも、先の『ハムレット』のところでも述べましたが、「シェイクスピアはベローナに来てはいない」という人もいます。館は映画が作られ作品が有名になってから作られたというのです。

ストーリーはほとんどの方が熟知していると思いますが、念のため



こちらでもあらすじを復習してみますと：

舞台は 14 世紀のイタリアの都市ベローナ。モンタギュー家の一人息子ロミオは友人達とキャピュレット家のパーティに忍び込み一人娘ジュリエットに出会い、たちまち二人は恋に陥った。二人は修道僧の元で秘かに結婚。修道僧は二人の結婚が、両家の争いに終止符を打つきっかけになることを期待する。

しかしその直後、ロミオは街頭での争いに巻き込まれ、キャピュレット夫人の甥ティボルトを殺してしまう。ロミオは追放の罪に処される。一方、ジュリエットは、大公の親戚のパリスと結婚する事を命ぜられる。

ジュリエットに助けを求められた修道僧は、彼女をロミオに添わせるべく、仮死の毒を使った計略を立てた。だが、この計画は追放されていたロミオにうまく伝わらなかった。そのためジュリエットが死んだと思ったロミオは、彼女の墓で毒薬を飲んで自殺。その直後に仮死状態から目覚めたジュリエットも、ロミオの短剣で後追い自殺をする。事の真相を知って悲嘆に暮れる両家は、ついに和解する、といったストーリーですね。

#### 素晴らしい翻訳が作品を高める

ここでは、ロミジュリの小説の最も有名なシーン。ベランダに出たジュリエットがロミオに向かって愛をつぶやいたシェイクスピアの言葉を原文のままご紹介してみましよう。

O Romeo, Romeo! wherefore art thou Romeo?

Deny thy father and refuse thy name;

Or, if thou wilt not, be but sworn my love,

And I'll no longer be a Capulet.

What's in a name? that which we call a rose

By any other name would smell as sweet;

私などにはとても難しい中世英語ですが、英文学者・中野好夫さんの訳ではこんな風になっています。

<ジュリエット>

ああ、ロミオ様、ロミオ様！

なぜあなたは、ロミオ様でいらっしゃいますの？ Why are you Romeo?

お父様と縁を切り、家名をお捨てになって！ Thy → your, thou → you, wilt → will

もしもそれがお嫌なら、せめてわたくしを愛すると、お誓いになって下さいまし。

そうすれば、わたくしもこの場限りでキャピュレットの名を捨ててみせますわ」

名前にどんな意味があるというの？

バラという花にどんな名前をつけようとも、その香りに変わりはないはずよ。

さすがに名訳者の日本語は美しく素敵ですよ。

『ロミオとジュリエット』が世界的に知られるようになってから、物語に合わせるように舞台となった家や、ジュリエットが胸の内をささやいたというベランダが作られた。物語が、あるいは映画が売れてその舞台が観光地化するのほどこでもある流れです。それはそれで人々に想像の空間と夢を与えてよいことかもしれません。

いずれにしても、「ロミオとジュリエット」は何回も映画化され、ミュージカルで演じられ、世界中の若者たちの心をとらえてきた小説です。その一端がジュリエットの住んでいたという館に残っていました。写真をご覧くださいませ。

訪れた日はあいにく雨の降る夕方で写真は残念ながら暗くなってしまった。

ジュリエットがロミオに愛をささやいたという 2 階のベランダです。



中庭の一角にはジュリエットの等身大のブロンズ像があり、その細い手やふっくらとした胸は観光客が触ったり撫でた跡でとりわけ光っていました。触れば恋が実るとの言い伝えがあるというのです。

館の入り口の壁には世界から寄せられた恋人達のラブレターが、もう場所が無いほどに貼られていました(2種類)。



### “I love you.”をあなたならどう訳す？

ロミジュリの切ないほどの純愛。これほどの作品も、翻訳次第で心ときめく作品に、また逆につまらない作品になってしまうかもしれません。先ほどの中野好夫氏の夢のような美しい日本語を知った後で、この機会にもう一問。入試の英語が難しい早稲田に入った皆さまですので一緒にお考えください。

問題はもっともポピュラー—というか大衆的な愛の言葉：**I love you.**です。

これを皆さんだったらどう訳されるでしょうか。

「私はあなたを愛しています」——もちろん入試問題では正解ですね。文法的にも合っている。でも面白くない。つまらない。愛する当事者間でも、今どきはこんな硬い言葉は使わないでしょう。文学作品であればなおさらですね。すぐに思いつく言葉では：

愛してるわ (の)、好きよ、好きなの、あなたに首ったけよ、私はあなたのもの、もうどうなってもいいわ、……女性側の言葉ですがまだいくらでもありますね。皆さまは愛する人にどう伝えたでしょうか。ご自分の経験でなくても「これはどうだ！」みたいな訳はありますか？

ものの本によるとロシアのツルゲネーフは、これを「死んでもいい」と訳したといひます。そしてロンドンに留学、今年没後 100 年の夏目漱石は、これを男性側の言葉として「月がきれい

すね」と訳した。これについて「あなたが月のようにきれいだ」とか「あなたと見る月がきれいだ」などと、いろんな解説が付いたようですが、つい少し前に終わったNHKの朝ドラ「とと姉ちゃん」にも出てきました。

主人公常子に思いを寄せていた生物学好きの大学生が自分の思いを伝えるのに「月がきれいですね」と言った。それを文学好きな妹の鞠子が聞いて「それって I love you のことなのよ」と常子に解説していたのを思い出します。

I love you. ——では、自分だったらどう訳すでしょうか。翻訳練習の格好の研修教材になるかもしれませんね。

### シニアの休日 in Rome

最後に、イタリア滞在でもう一つのハイライトは、映画「ローマの休日」の撮影舞台でした。文学紀行ではありませんが、せっかくなので、撮影してきた写真だけご紹介します。映画が制作されてから半世紀あまり。白黒の画面ながら、あの新鮮な感動と、鑑賞後に残るほのぼのとした情感は変わっていませんね。その映画のロケ地をたどって「シニアの休日 in Rome」としやってみました。

まず、アン王女を演ずるオードリー・ヘップバーンはあくまでキュートだし、  
新聞記者を演ずる渋いグレゴリー・ペックもおおらかな人間愛がにじみ出ています。



ローマにあるスペイン階段。この階段で2人が心を寄せ合ったシーンが出てきました。

「真実の口」——嘘をついた人がこの中に手を入れると決して抜けない、という。王女がおずおずと手を入れていたシーンが思い出されてきます。でも、

その円盤は古代ローマ時代のマンホール蓋だったといわれています。よくぞまあ、上手に伝説を作り上げたものですね。



ローマのコロッセウムの外側と内側。



ローマを訪れたらやはりバチカン市国も目にしておかなければいけない。バチカン宮殿とその前の広場です。法王のミサともなると広場がすべて埋め尽くされるのです。

### 「早稲田は地球の上にある！」

最後に、私が文学紀行をするようになった原点みたいなものに触れたいと思います。その一端は「都の西北」の母校にあります。昭島稲門会の会報第1号8ページ「母校追想」で少し書かせていただきましたが、それは商学部にて在学当時のことでした。

## 大隈講堂

昭和 30 年代後半の商学部には名物商学部長の中島正信教授がいました。専攻は国際経済論。小太りで髪の毛が濃く長くちょび髭が似合っていました。残念ながら先生の講座を受講する機会はありませんでしたが「早稲田は地球の上にあります！」との獅子吼は何回も耳にし他学部の学生にも知られていました。

「檄に刺激されたから」は言い過ぎかもしれませんが、呼びかけが胸のどこかに残っていて今の自分を創ってくれたような気がするのです。卒業すると私はNHK学園高校の教師を務め、そこでソ連旅行記を書いたことが縁となって新聞社に入り、やがて特派員として 10 年間パナマに駐在、北南米とヨーロッパを回っていました。

定年後はスペインのマラガ大学に 1 年間留学。そこから「ドン・キホーテ」を第 1 作目に世界文学紀行を始め、この 10 年間に 15 作品の舞台を訪ねてきました。大体、1 回 1 週間から 10 日間の日程ですが費用が 15 万円から 30 万円ほどかかります。ときには新聞や雑誌に掲載され原稿料が入ることもありました。取材経費の半分にもなりません。そこで、各回の旅の取材費用については、シルバー人材センターで、自転車管理や市報の配布、また元の職場で訪日外国人のアテンドの仕事などをして蓄え旅費に充ててきた次第です。

もう一つ。高校時代の恩師に言われた言葉でした。「君たち、そんな浅い薄っぺらな本を読んでいるで大作に取り組みなさい、大作に。まあ、古典だな。今は全てが分からなくてもいい。でも読んだ後は自分が大きくなったような気がするよ、きっと」。

数年で消えていってしまうような軽い小説ではなく、何十年、何百年と歴史の評価に耐えてきた文学作品や映画は、やはり昔も今も人間形成の大きな力になっていると思います。

大隈講堂を初め、母校には青雲の志を燃やす何かがありました。また現在も校友の皆さまとの交流はいろんな刺激を与えてくれています。その意味で、今ここに出席して下さっている皆さまにも心からの感謝を申し上げ、私の話を終わらせていただきます。

長時間のご静聴ありがとうございました。